

森重敏の万葉仮名論は果たして五母音説なのか？

安田尚道

森重敏 (1975) 「上代特殊仮名遣とは何か」(『萬葉』89) のことは、『毎日新聞』(昭和 50 (1975) 年 12 月 1 日夕刊) の学芸欄に、「万葉人も母音は五つ／上代特殊仮名遣い／波紋を呼ぶ新学説」という題で、松本克己 (1975) 「古代日本語母音組織考」(『金沢大学法文学部論集 文学篇』22) とともに大きく取り上げられた。

森重 (1975) については迫野虔徳 (1976) 「【昭和 49・50 年における国語学界の展望】音韻 (史的研究)」(『国語学』105) が、以下のように紹介している。

上代語にあっても母音はアイウエオの五つであり、いわゆる乙類というのは、それに「音節緊縮」の機能をもつ i が、臨時的にことさらに加重したものであって、その臨時的合成音を、音声の瑣末までかきわける万葉仮名がたまたまうつしただけのことだという。

従来、橋本進吉の研究をもとに、金田一京助 (1938) 『國語史 系統篇』や大野晋 (1957) 『日本語の起源』が上代語の母音をローマ字で a i u e o ī ē ö と書き、母音の数は八個であった、とした。しかし、橋本 (1938) 「國語音韻の變遷」(『國語と國文學』15-10) は乙類母音の音価を、キ (k̄ii), ケ (k̄ei または k̄æ), コ (k̄ö) のように推定したのだから、金田一・大野は、「k̄ii」「k̄ei」「k̄ö」をそれぞれ一個と数えていることになる。

一方森重は、乙類音節の存在を認め、カ行を例にとると、カ (元々カ)・キ_甲 (元々キ)・キ_乙 (元はク+イ)・ク (元々ク)・ケ_甲 (元々ケ)・ケ_乙 (元はク+イ)・コ_甲 (元々コ)・コ_乙 (元はコ+イ) の八個があった、とするようだから、金田一・大野流に数えれば、八個の母音があった、ということになるろうし、もし、「森重説は五母音説だ」というのなら、橋本推定音価に基づく母音個数も変わってくることになるろう。母音の数を数える際は、母音音声の数を数えるのか、母音音素の数を数えるのか、をはっきりさせないと議論が空回りすることになる。